瀬戸内晴美傑作シリーズ

身がわりの夜

瀬戸内晴美傑作シリーズ

身がわりの夜

講談社

© 1967
HARUMI SETOUCHI

第1刷　昭和42年6月20日

定価300円

瀬戸内晴美傑作シリーズ
身がわりの夜

著　者　瀬戸内晴美

発行者　野　間　省　一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2—12—21
振替　東京　3930
電話　東京(942)1111(大代表)

印刷所　多田印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

Printed in Japan
落丁本・乱丁本は
お取り替え致します

目次

再会……七
あいびき……二五
妖精の季節……二九
身がわりの夜……三七
樹氷……七七
恋の罠……九一
ネヴァモア……一一
冬銀河……一三
いろ……一七九
はじめての落葉……一九九

装画 川田幹

構成 吉田幸子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瀬戸内晴美傑作シリーズ

身がわりの夜

再

会

一

牛乳風呂から首だけ出し芙樹子は目をとじていた。ただの湯とはちがうなめらかなミルクの肌ざわりが、全身にねっとりとまつわりついていた。

白濁の湯の中で、芙樹子は温まった脚や腕をゆるやかにのばしたりまげたりした。普通の風呂よりは大きくつくられた二人でゆっくり入れる白いタイルの楕円の湯桶は、浩貴(ひろたか)が芙樹子を迎えた時、新しく設計しつくりつけたものであった。入浴の好きだった浩貴は湯殿に贅をこらしていた。七色の切子硝子を透してくる午ちかい陽ざしが、七彩に染まり湯殿にたちまよう湯気をプリズムのように光らせている。

このミルク風呂で朝湯を楽しむ贅沢も今日限りだ。売られてしまったこの邸から明日は立退かなければならなかった。そう思うと、今更のように、この湯殿で、浩貴と二人で持った濃密な秘めやかな時間が、温まった芙樹子の全身によみがえり、急に激しい血のさわぎが軀の奥をかけめぐった。

芙樹子は、荒々しく白い湯をはじいて立ち上り、シャワーの下にかけよった。二十八歳のみのりきった裸身が七彩の湯気をかきみだした。

芙樹子の腕がのび、シャワーの栓が満開にひねられると、冷水が激しい勢いで芙樹子の上に落ちてきた。頭に巻いたピンクのタオルがほどけ、肩をすべりおちた。一度も染めたことのない黒髪が、生きもののように芙樹子の背をすべり、先は扇形にひらいて形のいい、愛らしいお尻の丘を羽毛のように撫でた。

水の冷さと激しさが、ほてった皮膚にしみとおり、芙樹子の血のうなりを静めていく。

「奥さま！　奥さま！」

女中のよし子の声が甲高くひびいて、湯殿の戸が、がたがたノックされてるのにようやく気づいた。シャワーの音で、聞えなかったらしい。芙樹子はシャワー

を止めた。
「お電話でございます。間宮さまとおっしゃいました」
「えっ、間宮？　たしかにそういった？」
「はい、聞きただしましたからまちがいございません」
芙樹子は、一瞬、見事な彫像のように全身を剛直させて息をつめた。
「あのう、どういたしましょう」
「すぐ、いくわ、ちょっと、待っていただいて」
大いそぎで、軀をふくと、まだ濡れのこっている素肌に下着もつけずガウンをまといつけて廊下をかけだしていった。受話器をとりあげる時、冷水を浴びた直後の軀が、かっと一時に火をふいたように燃え上ったのが感じられた。
「もしもし」
太い男の声が伝わって来た。目まいのしそうななつかしさがこみあげてくる。
「ごきげんよう、ずいぶんお久しぶり」
芙樹子は自分の声の抑揚に、内心の動揺がみじんも出ていないのを聞きとり満足した。
三年間絶えて聞いたことがなく、毎日忘れたことのない間宮の声をむさぼるように全身で吸いとりながら、芙樹子は元子爵草田家の未亡人にふさわしい品を失ってはならないと、自分にいいきかせていた。それを間宮がのぞんだことではないか。浩貴にきびしく躾られたおっとりした話し方と、上品な声の出し方を決して忘れてはいなかった。
「芙樹さん？　何だかちがうようだな」
「あら、もうすっかりお忘れになって？」
「声にまで貫ろくが出来たようだな」
「皮肉をおっしゃりたくてわざわざお電話下さいましたの？」
「とんでもない。半年まえ草田さんがなくなったということを新聞でみた時から、どんなに電話したかったかしれやしない。でもあんまり故人に対して礼がなさすぎると、つらいがまんをしていたんだ」
「……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芙樹子は受話器をあてた左の耳から、男の声が湯のようなあたたかさで軀の芯に流れこむのを感じていた。

「ちょっとお待ちになって」

といった声は、さっきの習慣的な冷い響きはかき消え、おしつまったかすれ声になっていた。

「あたくしの部屋に、電話きりかえさせますから……今、お風呂に入っていたので、ここの電話じゃ寒いの」

鍵をかけた自分の部屋にきりかえた電話が通じると、芙樹子の声はもう、見栄も外聞もなくなった。

間宮との恋に燃えていたころ、毎晩、真夜中にかけあった電話の睦言が、胸いっぱいによみがえって、軀じゅうが想い出の愛のことばで、オルゴールのように鳴りだしそうに感じた。

妻が療養所に入っていたそのころの間宮は、芙樹子と別れて家に帰りつくとすぐ、電話をかけてよこした。芙樹子は芙樹子で、新橋の芸者としてのお座敷のつとめが終ると、真夜中といわず、暁方といわず、おかまいなしに間宮に電話をかけた。戯曲と評論を書くことが仕事の間宮は、家にいる時は、暁方まで書斎にこもっているため、いつかけても、すぐ太いバスが受話機に伝ってきたものだ。

芙樹子は逢えば無口な方で、お座敷でも、人並外れたノーブルな感じの美貌だけが売物の芸者であった。銀座のバーにいたのを、一二三のお女将に見出され、何が何でも芸者になれとすすめられてなったのだから、三味線はもちろん、小唄の一つも歌えない能なし芸者であった。

それでもつんととりすましたような冷い美貌が、客にうけて、おひろめした最初から、結構売れっ子になった。

「無口なのはバカで、気のきいた口のききようも、ウイットも持ちあわせがないのさ」

など、同輩にかげ口をきかれても、別に感情を顔にあらわすような女ではなかった。

間宮は、そんな芙樹子の一番はじめの客であった。

間宮財閥の先代虎之助の妾腹の子だとかで、金にも

ならぬ書物をしていて、なしくずしに、分けられた財産を喰いつぶしているような生活であった。遊び方がきれいだというので岡惚れして打ちこむ妓も一人や二人でなかったという噂だ。芙樹子に通いだしてからは、まるで一図な若者のような情熱を示した。

「情熱をことばでなくからだで語る女だ」

と、ひそかに間宮がお女将にもらしたということを聞き、芙樹子は首まで赫くしたことがあった。

間宮はまた、物を書く職業の者特有の聞き上手で、無口な芙樹子から、いつのまにか、その昏い過去の傷あとをのこりなく語らせてしまっていた。

二

お女将の宣伝で、芙樹子はある梨園の名優と、名ある貴婦人の間に出来たかくし子だというようなことがまことしやかに伝えられていたが、真赤な嘘だった。

芙樹子は亀戸の方の小さなガラス屋の娘に生まれた。ガラス屋といっても、店もないような貧しい家で、父はガラス切りの職人だった。

芙樹子が十二の時、父が腎臓結核で死んだ後には小児麻痺で片脚の萎えた弟の達雄と、病弱な母が残された。

民生委員の保護をうけながら、母は弱い身体で日傭労働につき、芙樹子は十二の時からラーメン屋に手伝いにいっていた。

子供の時は、鼻の高い眉の濃い顔が権高な意地っぱりの表情にみえ、かあいげのない子供だった。栄養失調でやせた身体つきも、ラーメン屋の小僧たちが、針金とあだ名するほどで、男の子のようにぼきぼきしていた。

栄養がおくれていたためか、女のしるしもおそかった。十六の冬、はじめてそれをみた頃から、芙樹子は急激に変貌していった。それは、自分でも目をみはるほどのめざましい変り方であった。

北国の春がおそいかわりに、一時に花の咲きそろう季節が、むせるように豊醇な空気をかもすのと似ていた。

芙樹子のくすんだような浅黒い皮膚が、艶をおびて

小麦色に輝きだした。扁平だった胸に、乳房は、百千の花の蕾を集めたような勢いで、急に内部からもりあがり、つきあげてきた。唇がいつでもしめりはじめた。生理の週期にはことにはく息までなやましく匂いを放った。

その頃、母が過労で倒れてしまった。表通りに開業したばかりの大沢病院の副院長は、院長の弟だったが、まだ独身で、見立ては、院長より上手だという噂だった。

「うちの兄貴はガッチリやだからな。本当の話、きみのとこみたいな被保護家庭の患者はとりたがらないんだよ」

副院長の大沢は、薬をとりにいった芙樹子を診察室によびこみ、黒いレントゲン写真をみせながらいった。

「すみません」

芙樹子は恥しさとくやしさで、たちまち涙があふれ、肩をふるわせてうつむいた。

「ま、いいさ、一人ぐらいぼくのごまかしで何とでもなるさ。薬も、受付を通さずあげるから[redacted]て、ぼくのところへとりにおいで」

大沢は病院の近所のアパートに住んでい[redacted]芙樹子は知っていた。

「いいね、わかったね。これは三日分だから今度は金曜日の晩だ。ぼくの部屋は、二階の東側の一番奥だ。まっすぐ、来て、ノックするんだよ」

大沢の手が肩にかかって、ごりごり、芙樹子の肩をもむようにおさえた。芙樹子はだまって大きくうなずいた。

頬骨が出て口の大きな大沢は、いわゆる男らしい容貌の持主だったし、看護婦がさわいでいるのを芙樹子も知らないではなかったが、好きではなかった。

それでもその親切には感謝しなければいけないと思った。

言われた通り、金曜日の夜、芙樹子は九時半ごろアパートを訪れた。時間のせいか、廊下には人影もなく、芙樹子は誰にもあわず副院長の部屋の前までたどりついた。

ノックすると、すぐ内からドアがひらいた。
紺がすりの和服を着た男が、すばやくドアをしめ、鍵をかけた。
芙樹子は見なれない副院長の和服姿に一瞬目をうばわれ、鍵のかかったことに気づかなかった。はじめてみる高級なアパートの内部にも目をうばわれていた。
大沢は、芙樹子の肩をおし、ソファーに坐らせた。
「まあ、おかけ、大変だね、母さんがあれじゃ」
堅くなってちぢこまっている芙樹子の横で、大沢は、器用にサイフォンのコーヒーをわかし、二つのカップにつぎわけて芙樹子にもすすめた。
「弟さんの脚も、手術でいくぶんかはよくなるんだがなあ、あんたも大変だね」
芙樹子は何といわれてもおしだまっていた。一刻も早くこの居心地がよすぎて居心地の悪い部屋から出て行きたかった。
「これが、おかあさんの薬、内しょで外国の高い薬をつかってあるよ」
「すみません……」
「あんたもひどく疲れているようだね。顔色がよくない。勤めはつらいのかい？」
芙樹子はそのころ製本屋に通っていた。
「ちょっとお待ち、元気の出る注射をしてあげよう」
「いいんです。もう帰ります」
「待ちなさい」
大沢の声が急にきつくなった。芙樹子はうかした腰をも一度ソファーにへなへなとおろした。気むずかしい顔になった大沢は、机の引きだしから、注射薬のアンプルを出し、手早く注射器に薬をすいこませた。
「さあ」
芙樹子は昨夜久しぶりに風呂に入っていてよかったと思いながら、おずおず右腕をさしだした。注射のとちゅうから芙樹子は急激な睡気におそわれ、すうっと後頭部から引きこまれるような無感覚な状態になった。
気がついた時、芙樹子は大沢のベッドの中[illegible]。すぐ横に男の大きな顔があった。ああ[illegible]からない悲鳴をあげ、とびおきようと[illegible]

は自分の軀が何一つ着けていないことに気づいた。男の軀がのしかかり、芙樹子をおさえつけた。その軀も自分と同じ状態なのを感じ、芙樹子の全身は鳥肌だった。軀の一部に覚えのない一種の痛みがのこっていた。

「処女だったんだね。責任はもつよ」

男の狎れ狎れしく近づいてきた顔に、いきなり爪をたて芙樹子はひいっと、笛のような声をあげて泣きだしていた。

その後、何故、大沢の命令通り、彼の部屋に行くのか芙樹子自身にもわからなかった。

行けば必ず大沢は獣のようにおそいかかる。あの最初の夜以来、さすがに麻酔薬だけは使わなくなった。その度、芙樹子は死物狂いになって抵抗する。結果は、大沢の欲情はいっそう刺激され、芙樹子は、抵抗に疲れはてて仮死状態の中で大沢の自由になってしまうという順序のくりかえしであった。

妊娠した時、意外にも大沢は子供を産ませたがった。芙樹子は十八歳で母になるということが呪わしく恥しく、死んでしまいたいと思った。そのころでは、芙樹子の家の暮しは、事実上、大沢にまかなわれていたので、芙樹子はもう大沢の意のままに動くあやつり人形のようになっていた。

男の子が生まれ、芙樹子は、子供と二人で母の家から別の家に移らされた。もう、近所では芙樹子が大沢病院の副院長の二号であることを誰しらぬものもなくなった。

芙樹子の美しさは子供をうんだ後で、また一枚皮をはぎとったように光りだした。皮膚は琥珀色にぬめぬめと艶をまし、卵型の中高な顔に、鼻筋が高貴な品をたたえてすっきりととおっていた。この一、二年で急にのびた背丈はきゃしゃな骨組に支えられ、ファッションモデルにでもなれそうな均整のとれたスタイルになっていた。

どんな高価な衣裳をつけさせても、衣裳負けすることがないスタイルと美貌が芙樹子の鬱々とした心にかかわりなく芙樹子の外見を飾っていた。

大沢が院長の選んだ嫁を迎える日が来た時、芙樹子

に思いがけない自由が与えられた。子供は院長夫婦が引きとり、芙樹子には手切金のかわりに、住んでいる小さな家がそのまま与えられた。どんな形にしろ、芙樹子と手を切らなければ、全国でも一、二といわれる医療器具店の一人娘との結婚に不都合なのであった。

芙樹子は、大沢と別れ、はじめて青春をとりもどしたような喜びを味った。家を売り払い、芙樹子の過去をしらない都心の町に引移った。今ではもう、完全に寝ついてしまった病母と不具の弟に女中をつけ、自分は銀座のバーにつとめだした。

大沢との結びつきは芙樹子に男の肉体を極端に嫌悪させた。冷いほどの美貌が、みがきこまれて冴えていけばいくほど、芙樹子めあてにむらがってくる客たちは、芙樹子の男嫌いの看板に、煩悩をかきたてられていくようであった。

三

間宮との三年ぶりのあいびきの時間まで、その日、芙樹子は何も手につかなかった。

六時に昔よく二人でいった六本木の中華料理店でという約束であった。

セットしたての髪を間宮が好まなかったくせまで細かに思いだし、芙樹子は自分で洗い髪をきりきりとまきあげた。さんざん迷った末、着ていくものは、黒のワンピースにきめた。フランスの布でつくったその服は喪服のようでもあり、夫に先だたれて半年目の若い妻の服としては申しぶんない。芙樹子は黒い服を何のかざりもなしに着た自分が、この場合どんな粋な和服を着こなすよりもエロティックに見えることを、無意識に計算していた。

間宮には一度も見せたことのない洋装の自分を見せたかった。洋服の着こなしからアクセサリーの選び方まですべて死んだ浩貴の、芙樹子にのこしてくれた遺産の一つであった。

赤く塗っていた爪をふき、青味のかかった真珠色に染めあげた。帽子は、黒いチュールのついたものを選んだ。精巧なレースのかげで、彫の深い芙樹子の顔が、憂鬱なかげをもつことも計算に入っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com